報告 Reports.

氣壓急降にて颶風類の出現を知る

佐竹文治

On the local Storm and Gale Warning in Bessi Copper Mine District.

By Bunzi SATAKE.

住友別子鑛業所に於て大正六年三月以來運輸土木業等の要求により暴風信號の掲揚を始めらる。信號を掲揚して其適中せざることありては之を掲ぐる側も、信號に依りて操業する方も相互不利なるにより、執業困難又は被害を來す程度に重きを置きて、氣壓急降の場合及び暴風(東方強風以上、西方烈風以上)の場合に晝間は白赤塗分球一箇(従前の疾風以上の信號白赤染分け旗に因み)夜間は綠燈一箇(舊警報信號燈に因み)を新居濱四阪島兩氣象觀測所内に掲ぐることゝなれり。之なれば信號を掲げて適中を誤ることもなく、執業者には大に參考となるなり。

東方強風(一秒十米即ち一時間二十二哩、風力計定數變更前の速度以下同じ)以上西方烈風(一秒十五米一時間卅四哩)以上となれば四阪島新居濱間の曳船困難なる運輸業者の經驗により、此期間の信號掲揚の要求ありたるものにて、新居濱より九湊の沖に在る四阪島に於て強烈風吹き始めて、之が信號を掲ぐれば、海岸附近尙ほ風強からざれども、既に沖合風強さを注意するためなり。

氣壓急降とは一時間に氣壓一耗近く降り四時間四耗即ち三耗五以上下降せるものを云ふ積りにて、去る明治二三十年頃中央氣象臺に於ても定時臨時氣象電報並に警報の記事に用ゐられしと記憶す。此の急降の場合は赤板若くは赤紙にて氣壓急降天候不穩を揭示又は通知し、且つ前記の信號を掲ぐる事となれり。

大正六年三月之を創始したれども同年は半途なるにより、之を省き翌七年より十二年まで六ヶ年間此急降により信號を掲げたる場合第一表の如し。

一、第一表に據り低氣壓の位置を仕譯くれば日本海最も多く朝鮮南及東海之に亞ぐ

一、又第二表を觀るに氣壓急降を來したる低氣壓の百分率九十三は颶風類にして僅かに同八は颶風なり。

一、第一表に據り氣壓急降の時刻を調べれば十四時最も多くして二時之に次ぎ
颱風は二時に多きを觀ること第三表の如し。

一、斯る低氣壓一ケ年間出現回數は颱風類とせるもの十乃至十六平均年十二回
にして颱風は年により一、二回ありたり。

一、氣壓急降の場合四阪島に於て強風吹初めは平均其急降後二時間にして最大
風は急降後平均十六時間なり、(第三表の如し但し颱風は算入せず)

一、又た氣壓急降の場合四阪島に於て強風吹始めの速度は平均一秒十二米にし
て其の最大風速度は平均同二十六米なり。(同前)

一、氣壓急降を來せし颱風類の出現は十月より翌年六月に及び、三月最も多く
一、二月之に亞ぐ。

一、七、八兩月に氣壓急降を起せしものは颱風のみなり。

翌日の天氣を豫察し見込報即ち豫報杯を發するに其資料としては、中央氣象臺
より發せらるゝ翌日の全國天氣豫報及び高低氣壓度付廿七字の電報を松山測候所
に依頼して轉報を受け、氣象實況電報は中央氣象臺より受得る規定なきにより、亦
同測候所に願ひて同臺より受けられたる午前六時の氣象實況報に據り調査せられ
たる高壓部及度一個低壓部及度二個等を、十五字に仕組みたる氣象實況拔萃電報
とも云ふべきものを受け、之に中央氣象臺より發せらるゝ全國暴風警報を受くる
の外未だ無線電信等にて氣象通信の設備もなくして材料乏しく、且つ通信の迅速
を缺く所に於ては氣壓急降により颱風類の出現を知る次第なり。(大正十三年末記)

附記第一表乃至第三表は略す

前 號 正 誤

本誌前號 49 頁第 17 行中 5.8/1000 ハ 58/1000 ニ 8.4/1000 ハ 84/1000 ニ訂正ス